

難治性疾患克服研究の対象となっている123疾患について

主任研究者； 尾崎承一

疾患名； 抗リン脂質抗体症候群

1. 初代研究班発足から現在までの間の研究成果について（特定疾患の研究班が独自に解明・開発し、本研究事業として公表したもの。なお、原則他の研究事業等に依存していないもの。）

（1）原因究明について（画期的又は著しく成果のあったもの）

	時期 及び 班長名（当時）	内容	備考
1			
2			
3			

他の研究事業の成果と分かち難い場合は、備考欄に「合」と記載し理由を付記。

（2）発生機序の解明について（画期的又は著しく成果のあったもの）

	時期 及び 班長名（当時）	内容	備考
1	平成6年 長澤俊彦	抗カルジオリピン抗体の一部は血管内皮細胞上のトロンボモジェリンに交叉反応を示し、線溶凝固系を抑制することにより血栓形成を促進することが明らかとなった。	
2	平成7年 長澤俊彦	抗カルジオリピン抗体が認識する抗原エピトープと抗リン脂質抗体症候群の臨床所見との関係	
3	平成10-11年 橋本博史	2GPI ペプチド反応性T細胞株の樹立	
4	平成17年 尾崎承一	血管炎アトラスを作成し、病理と臨床所見を検討した。	

他の研究事業の成果と分かち難い場合は、備考欄に「合」と記載し理由を付記。

(3) 治療法(予防法を含む)の開発について

ア 発症を予防し、効果があったもの

	時期 及び 班長名(当時)	内容	備考
1			
2			
3			

他の研究事業の成果と分かち難い場合は、備考欄に「合」と記載し理由を付記。

イ 完治に至らしめることはできないが、進行を阻止し、効果があったもの

	時期 及び 班長名(当時)	内容	備考
1			
2			
3			

他の研究事業の成果と分かち難い場合は、備考欄に「合」と記載し理由を付記。

ウ その他根本治療の開発についてもの

	時期 及び 班長名(当時)	内容	備考
1			
2			
3			

他の研究事業の成果と分かち難い場合は、備考欄に「合」と記載し理由を付記。

2. 「1」以外で、国内、国外を問わず、研究成果の現在の主な状況について

(1) 原因究明について(画期的又は著しく成果のあったもの)

	時期	内容	文献
1			
2			
3			

(2) 発生機序の解明について(画期的又は著しく成果のあったもの)

	時期	内容	文献
1	平成 14 年	抗リン脂質抗体産生を誘導する 2-グリコプロテイン 2 分子修飾に関する研究	自己免疫疾患に関する研究班
2	平成 16 年	抗 2-グリコプロテイン抗体が単球を刺激して MAPK 経路を介して組織因子を誘導する。	Int. Immunol. 2004, 16:1633
3			

(3) 治療法(予防法を含む)の開発について

ア 発症を予防し、効果があったもの

	時期	内容	文献
1	平成 15 年	ワーファリン投与が静脈血栓予防に有効	N Engl J Med 2003, 349: 631
2	平成 15 年	妊娠時にはヘパリン・低分子ヘパリン・低用量アスピリンを使用する。	Arthritis Rheum 2003, 48:728
3			

イ 完治に至らしめることはできないが、進行を阻止し、効果があったもの

	時期	内容	文献
1	平成 14 年 小池隆夫	抗リン脂質抗体症候群に対する rituximab の有用性に関する検討	自己免疫疾患に関する研究班
2			
3			

ウ その他根本治療の開発についてもの

	時期	内容	文献
1			
2			
3			

3.現時点において、次の事項について残された主要な課題及び今後の研究スケジュールについて

(1)原因の解明について

	課 題	解決の可能性	今後の研究スケジュール
1			
2			
3			

(2)発生機序の解明について

	課 題	解決の可能性	今後の研究スケジュール
1	劇症型抗リン脂質抗体症候群の発生機序について	あり	抗体による内皮細胞におけるシグナル伝達の解析
2			
3			

(3)治療法(予防法を含む)の開発

	課 題	解決の可能性	今後の研究スケジュール
1	劇症型抗リン脂質抗体症候群の治療法確立	あり	抗 CD20 抗体などを用いた前向きパイロット試験
2			
3			

#### 4. 重症化防止対策について

大多数の患者に対して外来通院によって症状のコントロールが可能な治療法（重症化防止のための治療法）の確立

	重症化防止のための治療法確立について解決すべき課題	5年以内に解決できる可能性	解決不可能な場合の理由	左記理由を解決していくスケジュール
1				
2				
3				
4				
5				